

韓国語母語話者による日本語発音の 聞き間違いと中間言語の音韻習得

李 敬 淑*

(e-mail: yiks70@daum.net)

目 次

1. はじめに	4.1.1 清音と濁音の混同
2. 先行研究	4.1.2 長音、促音、撥音の特殊拍
3. 研究方法	4.1.3 子音交替などの子音の問題
3.1 被調査者	4.1.4 直音と拗音の問題
3.2 調査語	4.1.5 母音交替の問題とその他
3.3 調査方法	4.2 聞き間違いにおける学習者の違い
4. 結果及び考察	4.3 中間言語の音韻習得の様相
4.1 聞き間違いの種類及び傾向	5. まとめ

1. はじめに

これまで韓国語母語話者（以下、韓国人）の日本語音声の知覚に関する多くの研究がなされてきた(石鍋 1997；小熊 2001；福岡 2005；関 2007；李 2011)。しかし、研究の多くは、清濁音やザ行音、特殊拍のように韓国人が苦手とする特定の音声項目に焦点を当てたものであり、日本語音韻習得における全体的な実態を調査した研究は、あまりない。

また、実際の日本語教育の現場では、音韻的に対立する二つの音韻(=音素)をミニマルペアで提示、比較し聞き取らせる方法が一般的である。しかし、このような指導法では、実際起こる学習者の聞き間違いに対処できないところがある。

例えば、韓国語の中に残っている日本語の外来語の中に土方(どかた)を意味する「노가다[nogada]」という言葉がある。日本語の「どかた(土方)」が노가다[nogada]になっ

* 亜洲大学 国際学部 非常勤講師 日本語学 日本語音声教育

たのだが、この発音は、語中無声子音(清音)が有声音化(濁音)する典型的な韓国人の特徴を示している。しかし、問題は、「どかた[dokata]→도가타[dogada]」に止まらず、노가타[nogada]のように/d/が/n/に変わってしまうようなことである。対照言語学的な研究では見逃しがちな問題であるが、実際の教室現場ではよく遭遇する問題である。つまり、/t-/d/は無声・有声という音韻対立だけでなく、歯茎という同じ調音点を持つ/d/や/n/とも混同されやすいのである。

韓国人日本語学習者に日本語の発音がどのように聞こえるのかを把握することは効率的な音声指導にも大変重要なことであるが、中間言語の音韻システムの全体像が解明されたとは言えない。外国語学習者は、母語の音韻体系に基づいた音声的誤りをしており、この音声的誤りは一つの体系を成していると考えられている(木村 1986)。的確な音声習得を助けるためにも、韓国人の日本語音声知覚の全体像を把握するとともに、学習者の誤りの傾向や種類、頻度を分析し、中間言語の音韻習得の現状を明らかにする必要がある。

本研究では、日本語音声の聞き取り調査を通し、学習者が目標言語である日本語の音声をどのように聞き取っているのか、日本語音韻習得における発音の聞き間違いの全体像を明らかにし、より効果的な音声指導法を考えたい。

2. 先行研究

韓国人学習者の日本語音声の知覚に関する研究として、まず、韓国人において習得が難しいとされる清濁音やザ行音、そして日本語の特殊拍の習得を分析したミクロ的な研究が挙げられる(戸田 1998; 小熊 2001; 福岡 2005; 二ノ宮他 2010)。

福岡(2005)は、日本語の破裂音の知覚面での習得について縦断研究を行った。その結果、韓国人学習者は、語頭の無声破裂音を有声破裂音に誤聴する傾向が強く、語頭の無声破裂音の習得が難しいと報告している。

また、二ノ宮他(2010)は、ザ行音とジャ行音の聴取能力と発話能力の関連性を調査した。分析の結果、聴取能力の高い学習者は「ジャ行音」の発話能力も高いが、「ザ行音」の場合は、聴取能力と発話能力に関連性は見られなかったという。「ザ行音」と「ジャ行音」の間にこのような違いが見られた理由として、学習者の第一言語の音韻体系の中に目標言語の音が部分的にでも共有されているかどうかということが、両者の違いに関与している可能性があるとしている。

また、戸田(1998)は、日本語学習者による促音、長音、撥音の知覚に関する縦断研究を通して知覚範疇化が目標言語である日本語に近づくように自己修正が行われることを明らかにした。

このように韓国人日本語学習者の日本語発音習得に関しては、韓国人が苦手とする一つの発音項目に焦点を当てた分析が多い中で、李(2011)は、全羅道方言話者である初級学

習者と中・上級学習者を対象に、「アクセント、特殊拍、母音の無声化、ン+ラ行音、ザ行音」の5つの項目に対する聴取の難易度を調査した。その結果、特殊拍の聞き取りが最も難しく、次に、促音、ザ行音、母音の無声化、「ん+ラ行音」の順に難しいと述べている。

また、石鍋(1997)は、韓国人日本語学習者による日本語の音声知覚は、全体としてどのように成され、どのような体系を成すのか、知覚実験を行った。韓国人日本語学習者に日本語の27種の子音(/p//pj//b//bj//m//n/ · · ·)+a/の音節を総当たりで聞かせ類似度のグループ分けを行った。その結果、日本語母語話者が有声・無声の対立、口蓋化するか否かという点を重要な識別の基準としているのに対し、韓国人学習者は、これらの点を無視しており、日本語母語話者とは、異なる基準で日本語の音声を知覚し、全体として異なる体系を成しているという。

以上の先行研究から分かるように、個別の音声項目については議論が進んでいるが、学習者が日本語の音声をどのように聞いているかについての総合的な観点からの研究は、まだ不足しているのが現状である。

本稿の目的は、韓国人の聞き間違いの種類、傾向、頻度を分析、考察を行い、学習者が目標言語である日本語の音韻体系をどのように習得しているか、日本語音韻知覚の全体像を探ることである。

3. 研究方法

3.1 被調査者

20代のソウル及びソウル周辺の方言話者であり、中級・上級¹⁾の日本語学習者の13名である。また、調査前のアンケート調査により、大学の日本語のクラスで日本語の音声について学んでおり、日本語の音韻体系についての知識を有していることが分かった。

3.2 調査語

調査語の構成は、中級レベル²⁾の日本語の単語が中心であり、また、聞きなれない単語をどのように知覚しているかも調べるために、やや難しいと思われる「じゅし(樹脂)」のような語や「だと、もかい」のような無意味語(5語)も盛り込んだ計173語である。

3.3 調査方法

調査語は、東京方言話者である40代の日本人女性にお願いし、録音してもらった。録音に

1) 調査開始前に学習者全員を対象として、日本語の学習歴及び総学習時間などを問うアンケート調査を行った。中級は日本語の学習時間が500時間以上、上級は800時間以上である。

2) 中級レベルの語彙選定は、日本語能力試験N3を基準とした。

はPanasonic社のICレコーダーRR-XR820を使用し、WAV16bit/44.1kHzで録音した。また、音声編集ソフトCoolEditを使って語と語の間に8秒～14秒のポーズを挿入し、回答できる時間を設けた。

調査は、静かな大学の教室で行われており、パソコンから流れる調査語の音声を1回のみ聞かせ単語を書き取るように指示した。

また、調査語は、語単独の環境で提示されており、純粹に聞こえてくる音韻に注目して書き取るようお願いした。さらに、聞き取り調査は、学習者の集中力や疲労度を考えて、2回に分けて実施しており、新密度の高い既知語が音韻知覚に影響しないよう、聞こえてくる通りに書き取るようお願いした。

4. 結果および考察

4.1 韓国人の聞き間違いの種類及び傾向

分析対象の総発話数は、2249語(173語×13名)であり、そのうち聞き間違いが観察されたのは446箇所である。一つの調査語の中で複数の聞き間違いが同時に起こる場合も多くあり、例えば、「だいびょ(代表)→たいびょ」のように清濁音の問題や長音の脱落といった誤聴が同時に見られた例がそれである。

また、本研究では、語の一部が音節ごと脱落した場合や回答が空欄になっている場合を聞き漏らしとしており、今回の調査において誤用全体(446箇所)の4%に当たる18個が観察された。

表1：聞き間違いの種類と割合

誤聴項目		誤聴数	誤聴の割合	具体例
清濁	清音→濁音	60	13%	きゃく→ぎゃく
	濁音→清音	24	5%	ずかん→つかん
長音	挿入	27	6%	いっ <u>そ</u> →いっ <u>そ</u> う
	脱落	62	14%	き <u>よ</u> う→き <u>お</u>
促音	挿入	22	5%	す <u>ば</u> い (スパイ) →す <u>っ</u> ばい
	脱落	24	5%	いっ <u>つ</u> う→い <u>ち</u> ゅう
撥音	挿入	14	3%	し <u>ぎ</u> ん→し <u>ん</u> い <u>ん</u>
	脱落	9	2%	ぜ <u>ん</u> い <u>ん</u> →ぜ <u>い</u> ん
拗音	脱落	13	3%	き <u>ゃ</u> く→き <u>あ</u> く

	拗音→/h/	9	2%	きょう→きほう
	拗音→直音 (ジャ行→ザ行)	21	5%	じゃま→ざま
	直音→拗音 (ザ行→ジャ行)	10	2%	どうぞう→どうじょう
	直音→拗音 (ツ→チュウ)	8	2%	つうしん→ちゅうしん
子音	子音交替	76	17%	かち→たち
	子音挿入	13	3%	かくう→かくふ
	子音脱落	12	3%	びん→いん
母音	母音交替	9	2%	ずかん→じかん
っ→く		12	3%	おんがっかい→おんがくかい
長音→促音		3	1%	じゅうしん→じゅっしん
聞き漏らし		18	4%	
	合計	446	100%	

表1は、韓国人の日本語の聞き間違いの種類及び全体の聞き間違いの中で占める割合を表したものである。また、表1をもとに主な聞き間違いの割合を示したのが図1である。

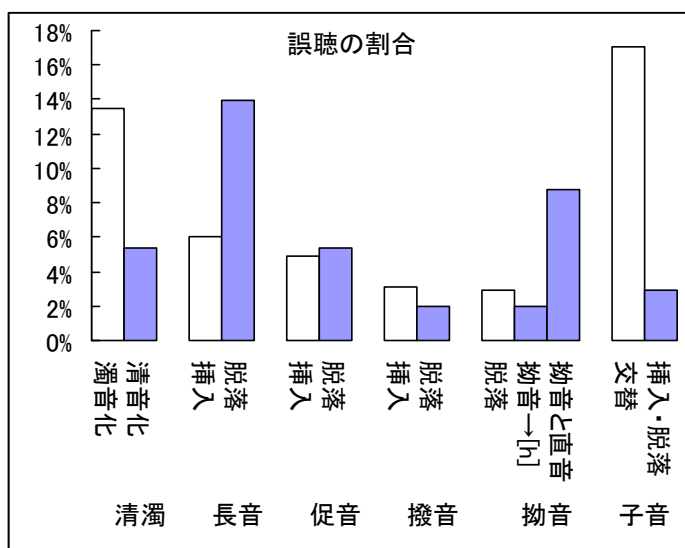


図1 主な聞き間違いの種類及び割合

表1と図1から分かるように、韓国人の日本語発音の聞き間違いは、大きく(1)清濁の間

題、(2)長音、促音、撥音の特殊拍、(3)拗音、(4)子音交替、(5)母音の変化、その他に分けられる。また、聞き間違いのうち、子音の問題、特に子音交替の問題が17%に上り、その割合が高い。次に目立つ誤聴として、これまで多くの先行研究で取り上げられてきた清濁音と長音の問題である。

4.1.1 清音と濁音の混同

韓国人の典型的な問題点とされる清音(無声子音)と濁音(有声子音)の問題について、知覚面では、「清音の濁音化」及び「濁音の清音化」が同時に指摘されている(梅田 1985)。

しかし、図1から分かるように、濁音を清音として聞き取る聞き間違い(24例)より清音を濁音として聞き取る誤聴の方が3倍近く多く見られた(60例)。また、清音の濁音化、濁音の清音化ともに語中より語頭環境において清濁の問題が頻繁に起きることが観察されており、福岡(2005)の調査結果と一致するものと言えよう。

また、「きゃく(客)→ぎゃく、くうぜん(空前)→ぐうぜん、ここ→ごこ」のように、語頭の清音の濁音化現象は、平板型(0型)の調査語において頻繁に起こり、平板型の語頭無声子音を有声子音と聞き誤る傾向が非常に強いことが分かった。日本語のピッチパターンが日本語の無声・有声子音の弁別に影響を与えていると指摘する研究があるが(鄭・桐谷 1998)、頭高型の場合、平板型より語頭子音の気音が強いことがあり、それが原因するとも考えられる。この問題については、今後検討を重ねる必要があろう。

4.1.2 長音、促音、撥音の特殊拍

韓国人にとって困難とされる長音、促音、撥音といった特殊拍は、図1から分かるように、誤聴率において大きな差があり、特殊拍の中で長音の習得が最も難しいことが分かる。

まず、長音の挿入及び脱落に関する誤聴は、前述の清濁音の問題同様に多く、全体の聞き間違いの20%に及ぶ89例が観察された。

「いっそ→いっそう」のように長音のないところに長音を挿入する聞き誤り(6%)より長音が入っているにも関わらず長音がないとする聞き誤り(14%)の方が2倍以上も多かった。皆川(1997)は、長音の挿入と脱落ともに語頭や語中より語末位置での知覚が困難であると報告しているが、本研究の結果もこれを裏付けるものと言える。この結果は、母音の長短の弁別力を養う中で、語末という環境においては長音として発音されても長音としての長さでないと判断したと考えられ、音声教育の際にもこの点に注意を向ける必要がある。

次に、促音の挿入及び脱落に関する問題は、全体の聞き間違いの10%を占めており、長音に比べると、誤聴の数は少ないと言える。また、「スパイ(1型)→すっぱい」のような促音挿入の聞き間違いは、アクセントが頭高型(1型)の調査語において多く見られ、「清音の濁音化」の問題と同様に語のアクセント型が促音の知覚に影響を及ぼしていることが分かった。

最後に、撥音は、長音や促音に比べると聞き間違いの数が少なく(5%)、習得に問題

がないように見える。しかし、撥音の挿入の場合、「しぎん(市銀)→しんいん」のように鼻濁音と隣接する環境や、脱落の場合は、「ぜんいん→ぜいん；れんあい→れあい」のように、母音と隣接する環境において聞き間違いが起りやすいことが分かった。

4.1.3 子音交替などの子音の問題

表1と図1から分かるように、今回の聞き取り調査において最も多かった誤聴は、子音交替などの子音の問題である。子音の問題は、全体の聞き間違いの23%に上る101例が観察されており、特に、特定の子音が別の子音に変わる子音交替の聞き間違いは、全体の誤聴の17%に達する76例が見られた。

子音交替の誤聴については、「らむね→なむね」のように語頭の/l/が/n/に変わるこれまでよく知られているものも含め、調音点や調音法が近い近似音間で起こる子音交替の聞き間違いが非常に多かった。例えば、無声破裂音という同じ調音法である「/k/→/t/；かち→たち」、歯茎音という同じ調音点である「/d/→/n/；どうぞう→のうぞう」、破擦音と摩擦音の近似音間の変化である「/tsu/→/s,h/；つつじ→しつじ、ひつじ」のようなものである。石鍋(1997)は、調音点や調音法が同じか近ければ習得が難しいと指摘しているが、本研究の結果も石鍋(1997)を裏付けるものと言えよう。

また、子音交替以外にも特に、語頭において「いたん→ひたん」や「いんり→ぎんり」のように子音挿入の問題も13例(3%)ほど観察された。そして、「しんにん→しんいん」のような子音脱落の問題も12例ほど見られた。このような子音挿入や脱落は、母音/i/の環境において、または母音/i/と撥音「ん」が接続する環境において起りやすいことが明らかとなった。

4.1.4 直音と拗音の問題

直音(非口蓋化音)と拗音(口蓋化音)の問題は、韓国語にも「/か/ vs. /きゃ/」のような対立があるため、習得はそれほど難しくないと言われている(松崎1999)。しかし、韓国語には、日本語の「つ」や「ザ行」の音がないため、母語からの負の転移が生じ、「つ vs. ちゅ」や「ザ行 vs. ジャ行」の聞き分けが難しいとされている。

今回の調査の結果、「つうか→ちゅうか」のように「つ」を「ちゅ」に聞き間違い例が8例(2%)ほど観察されたが、「ちゅ」を「つ」に聞き間違い例はなかった。また、拗音の聞き誤りにおいて代表的な問題とされる「ザ行音」と「ジャ行音」の混同についてだが、今回の聞き取り調査では、直音の拗音化(10例)より「じゃま→ぎま」のように、拗音(ジャ行)が直音(ザ行)に変わる誤聴が2倍以上多く(21例)観察された。苦手な発音である「ザ行音」を意識しすぎたため、本来なら正しく聞き取れるはずの「ジャ行音」まで「ザ行音」として聞き取ってしまう「過剰般化³⁾」現象が起こったと推察される。

3) 過剰般化(overgeneralization):第1あるいは第2言語学習者が目標言語の文法規則や意味的特徴を過度に一般化することにより、誤りが生じること(『応用言語学事典』p.119)

次に、「きやく→きあく」のように拗音が脱落してしまう場合も13例(3%)ほど観察された。拗音の脱落は、特に、拗音の先行音の母音が/i/の環境で起こりやすいことが分かった。

また、「きよう→きほう」のように「や、ゆ、よ」と/h/音との聞き間違いも9例ほど起こっている。この種の聞き間違いは、「きよう→きおう→きほう」のように、「や、ゆ、よ」と母音との曖昧な境界に加え、その上母音と/h/音との境界も曖昧になり、いわゆる、二重の識別過程が同時に発生したものと考えられる。このような点を踏まえ、実際の音声教育において拗音の問題を取り上げる際は、拗音と母音と/h/音を対照させる必要がある。

以上、今回の調査において拗音の聞き間違いは、全体の聞き間違いの14%に上り、清濁の問題や長音の問題と並んで、知覚において大きな困難な項目であると言える。

4.1.5 母音交替の問題とその他

「みつ→みち」、「ずかん→じかん」のような母音の聞き間違いは、9例ほど観察されており、主に/i,u/の狭母音間で母音交替が起こることが分かった。しかし、このような母音の聞き間違いは、上記の子音の問題に比べると、非常に少ないものと言える。

そして、その他の問題点として、「おんがっかい(音楽会4)→おんがくかい」のように促音「っ」を「く」に聞き間違い例が12例ほど見られた。また、長音を促音として聞き取ってしまう「じゅうしん(重心)→じゅっしん」のようなものも3例ほどあった。

以上、韓国人の聞き間違いの種類と傾向について分析を行った。

分析の結果、子音の聞き間違いが最も多く、これまでの無声・有声という二項対立のみならず同様の調音点・調音法を持つ音韻間で混同されやすいことが分かった。これは、従来の二項対立論(Minimal Pair)に基づく音声指導法では解決できない問題であり、音声教育の際も注意すべきところである。

また、これまでは、子音・母音といった分節音とアクセントを分離して教えてきたが、アクセントが分節音に及ぼす影響を考えた場合、アクセントによって分節音の具体的な実現様相がどのように異なるかを教える必要がある。

4.2 聞き間違いにおける学習者間の違い

同じ母語話者であっても異なる習得過程が予想される。本節では、上記で述べた聞き間違いの特徴に対して学習者間の共通点及び相違点を分析し、考察を行う。なお、聞き間違いの少なかった母音の聞き間違いなどは、分析から外している。

調査語173語を100%とし、正確に聞き取れた語数の割合を正答率としており、学習者別の正答率の分布は77%～91%である。

4) 「音楽会」は、「おんがくかい」また「おんがっかい」とも発音されるが、本稿の日本人の発音は「おんがくかい」である。

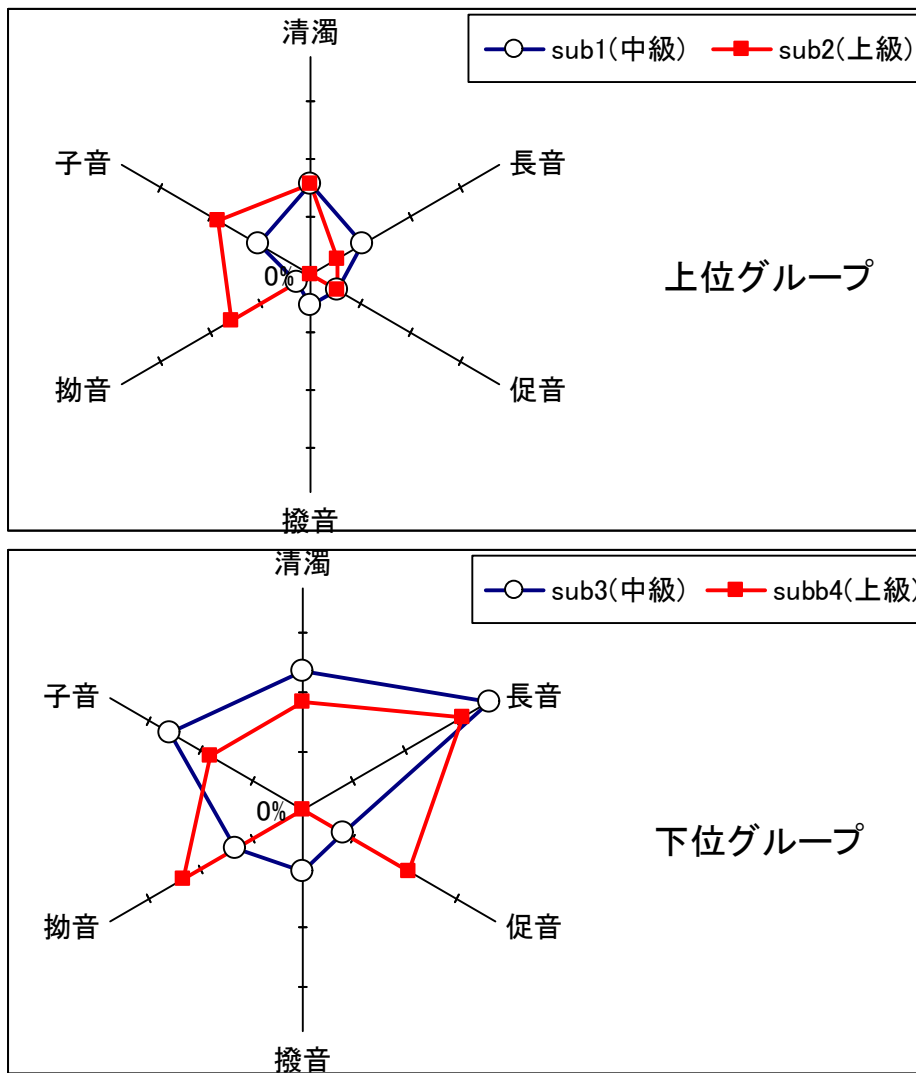


図2 調査語の正答率の上位グループと下位グループにおける誤聴率の比較

図2は、学習者間の聞き間違いの傾向及び誤聴率を比較するため、調査語の聞き取りの正答率の高かった上位2名と最も低かった下位2名の音韻習得を示したレーダーチャートである。各項目は誤聴率を示しており、語の正答率が最も低く、聞き間違いの数の多かったsub3(中級)の45個の聞き間違いを100%とした場合の各項目における誤聴の割合を示したものである。0%に近づくほどその音韻項目は目標言語に近いことを示す。

レーダーチャートの形から正答率の高いグループの中でもレーダーチャートの形に共通点と相違点が見られ、中間言語の音韻習得の様相が学習者によって異なることが分かる。

まず、正答率が最も高かった上位2名(sub1;91%、sub2;88%)の聞き誤りの種類と割合を見てみよう。sub1(中級)は、調査語において誤聴が19例しかなく、清音の濁音化(5例)や子音交替(4例)の問題が少し見られるのみである。正答率の高いもう一人のsub2(上級)は、23例の誤聴が観察された。清音の濁音化においてはsub1と同様の結果であるが、拗音の問題がsub1より多く、撥音の問題はまったく見られなかった。また、sub2(上級)は、長短の対立が頭の中に出来上がっており、長音と促音の識別が定着しているように見える。

次に、正答率が最も低かった下位2名(sub3;77%、sub4;78%)の場合、sub3(中級)は45例の誤聴があり、長音の問題が最も多く、その中でも特に長音の脱落現象が目立った。そして、清濁音の問題は清音の濁音化、濁音の清音化が同じ割合で見られた。子音交替や子音挿入の問題も目立っている。一方、sub4(上級)は、長音の問題が最も多く、sub3同様に長音の脱落が目立っている。しかし、促音や拗音の問題がsub3より目立っている一方で撥音の問題がまったくないという点で誤聴の様相がsub3と異なっている。

上位グループと下位グループを比較してみると、清濁音の問題、特に、語頭濁音の清音化は共通して見られるが、特殊拍においては、上位グループでは誤聴が少なく、音韻対立の概念が構築されていることが窺える。

また、図2から日本語の学習レベルが同じである場合でも、誤聴の量と質が異なることが明らかとなった。

これは、同じ母語話者の間でも音韻構築の様相が異なっており、効果的な日本語音声指導のためには、まず学習者の頭の中の音韻地図を把握するのが先決であることを示唆するものであろう。

4.3 中間言語の音韻習得の様相

第2言語習得において音声は、学習者の母語転移が最も強く現れる分野であると考えられている。また、中間言語は、母語とも目標言語とも異なる体系を成しており、不変で固定的なものではない(木村 1986)。本節では、図1と図2で示された聞き間違いという誤りの体系から母語の影響を分析し、中間言語の音韻知覚について考察を行う。

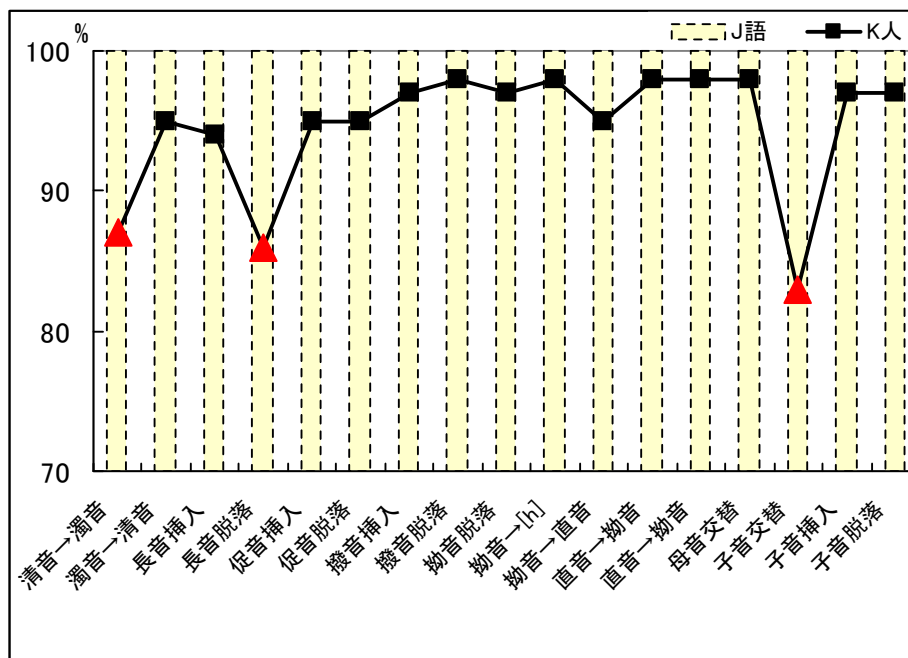


図3 目標言語である日本語と韓国人の中間言語の知覚率の比較

図3は、目標言語である日本語の音韻知覚率を100%とした場合の韓国人における日本語の音韻知覚率を示したものである。図3の音韻知覚率の算出は、目標値100%から表1の誤聴率を差し引いたものである。

4.2で述べたように、語の知覚正答率は、平均的に80%前後の高い数値を示しており、「清音の濁音化、長音の脱落、子音交替」3つの項目を除けば90%以上の高い知覚率を示している。

表1で表した韓国人の聞き間違いのうち、韓国語の音韻体系にないものは、清濁音の対立、母音の長短の問題、有声摩擦音の「ザ行」、歯茎摩擦音の「つ」などがある。

まず、清濁の問題について、韓国語には有声音と無声音の対立を持たないが、図1と図3から分かるように、学習者の中で完全ではないものの清濁の弁別能力が出来上がっていることが分かる。この清濁の弁別力は、語中環境では、韓国語にも平音が有声音として発音されるため、つまり、母語からの正の転移が起こり語中環境での清濁音の弁別はほとんど問題なく、清濁音の問題は語頭環境において特に目立っている。これは、中間言語として母語の音韻体系にない清濁の対立が出来上がったものの、部分的に母語の影響が残された形と言える。

また、同じく、母音の長短の対立も韓国語の音韻体系にはない⁵⁾が、母音の長短の弁

5) 신지영·차재은(2003)

別力が出来上がっていることが分かる(図3)。しかし、語末環境において挿入と脱落が著しく、また語頭環境での脱落現象も起こることから、まさに発展途上の状態と言える。

続いて、韓国語にない「ザ行音」に関しては、やはり、「ザ行」と「ジャ行」の弁別力は生じつつ、母語の負の転移として韓国語にない「ザ行」が聞き取れなく、「ザ行」が「ジャ行」に誤聴される場合が見られた。しかし、反対に韓国語の歯茎硬口蓋破擦音「ス[tɕ]」と類似している「ジャ行」を「ザ行」に誤聴する例が多く、「ジャ行」音を韓国語にない「ザ行」に聞いてしまう「過剰般化」が起こっており、「ザ行」と「ジャ行」の弁別が不安定なものになっていると言える。

最後に、韓国語にない「つ」であるが、母語の負の転移として「つ」を「ちゅ」に聞き取ってしまう例は見られたが、「ちゅ」が「つ」に誤聴された例はなかった。

母語にない音韻体系を習得するために、学習者は、日本語という目標言語に向け、母語の影響を残しつつ知覚基準そのものを変化させていることが分かる。

一方、今回の聞き取り調査において最も聞き間違いの多かったものが子音交替の問題である。

特に、子音交替の聞き間違いが調音点や調音法が同じ音の間で起こる例が多数観察された。例えば、「/k/→/t/；かち→たち」、「/d/→/n/；どうぞう→ぬうぞう」、「/tsu/→/s,h/；つつじ→しつじ、ひつじ」、「/l/→/g/；(らくえん→かくえん)」のようなものである。このように調音点・調音法が同じか近い音の間での誤聴の例は、これまでの先行研究でほとんど指摘されていないことである。

六川(2008)は、日本人の日本語を取り上げ、調音点・調音法が同じか近い音同士で聞き間違いが起こりやすいことを報告しており、この問題が普遍的な性質のものである可能性を示唆している。また、近藤(2012)も学習者の目標言語の音韻習得における母語別の個別性と普遍性を指摘しており、さらなる検証が必要である。

近似音間の誤聴の例として、拗音の脱落が挙げられる。特に、今回の聞き取りの調査において拗音に先行する音の母音が/i/の環境において拗音の脱落が起こりやすいことが分かった(例：きゃく→きあく)。「や、ゆ、よ」系の拗音は、韓国語にも音韻として存在するため、たやすく習得されると言われているが、母語の正の転移が考えられる場合であっても、音韻が置かれる音環境によって知覚が難しいことが明らかとなったと言える。

また、「きょう→きほう」のように、拗音と/h/音との混同が見られたが、この種の聞き間違いは、「きょう→きおう(拗音の脱落)→きほう(母音と/h/音の混同)」のように、二重の識別過程が同時に発生したと考えられ、学習者の頭の中で起こる音韻知覚プロセスを理解する上で非常に興味深い現象と言える。

つまり、拗音の先行音(/ki/)の母音が/i/の環境において拗音の脱落が起こりやすいことは上述した。また、韓国人の日本語の発音における生成面での特徴として、「にほんご(日本語)→におんご」のように、語中の/h/音が脱落または、弱化されることがしばしば

指摘される。母語である韓国語の影響とされる/h/音の脱落または、弱化現象が知覚にも影響を及ぼし、「きおう→きほう」という聞き間違いを起こしたと推察できるのではなからうか。

以上、韓国人の日本語音声の聞き間違いから学習者が頭の中でどのように日本語の音韻を知覚しているか、その全体像を分析、考察を行った。外国語学習者は、母国語の音韻体系に基づいた音声的誤りをするとされている(木村 1986)。しかし、今回の調査の結果、聞き間違いが起る原因は、単に母語の影響のみではなく、言語普遍的なものもあることが示唆された。

また、4.1節で、音韻の知覚におけるアクセントの影響を述べたが、各音韻の異音や余剰的特徴についても音声指導の際、知識を与える必要がある。抽象的な音韻という概念が具体的な音声環境においてどのように発音されるのか、環境による音変化の知識を知ることにより、聴取能力の向上も期待できるからである。

5. まとめ

これまでは韓国人の日本語の音韻習得について、ある特定の音声項目に焦点を当てた研究が多く、中間言語の音韻習得の全体像が見えてこなかった。

本研究では、韓国人の聞き間違いの種類、傾向、頻度を分析、考察を行い、学習者が目標言語である日本語の音韻体系をどのように習得しているか、その全体像を探ってみた。

分析の結果、韓国人の聞き間違いは、大きく(1)清濁の問題、(2)長音、促音、撥音の特殊拍、(3)拗音、(4)子音交替、(5)母音の変化、その他に分けられ、そのうち子音の聞き間違いが最も多かった。また、同様の調音点・調音法を持つ音韻や近似音間で聞き間違いや起こりやすいことが明らかとなった。これは、従来の二項対立論(Minimal Pair)に基づく音声指導法では解決できない問題であり、音声教育の際にも注意すべきところであろう。

また、学習者間で聞き間違いの種類、頻度に差が見られ、同じ母語話者間でもそれぞれの中間言語の音韻構築が異なることが分かった。そして、聞き間違いが起る原因は、単に母語の影響のみではなく、言語普遍的なものもあることが示唆された。

さらに、音韻の知覚におけるアクセントの影響が明らかとなり、各音韻の異音や余剰的特徴についても音声指導の際、知識を与える必要があることが分かった。

これまでは、対照分析法に基づくミニマルペア方式の音声指導が主流であった。本研究で得られた知見を生かすことで、音声指導の順位や学習者別の指導が可能となり、より効果的な音声指導が期待できよう。

今後は、音韻習得の習得状況の時間的変化を明らかにするため、初級学習者を対象に縦断研究を行う計画である。また、第2言語習得の普遍性と個別性についても研究を進めていきたい。

【 参考文献 】

- 신지영·차재은(2003) 『우리말 소리의 체계』 한국문화사
- 石鍋浩(1997) 「韓国人学習者による日本語音声知覚体系に関する一考察－日本語母語話者との対照を中心に－」 『言語科学論集』 1号 東北大学 pp.3-14
- 李香蘭(2011) 「日本語音声教育における聴取の難易度」 『日本文化學報』 48 日本文化学会 pp.39-57
- 梅田博之(1985) 「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」 『日本語教育』 第55号 (日本)日本語教育学会 pp.48-58
- 小池生夫 他6人(2003) 『応用言語学事典』 研究社
- 小熊利江(2001) 「日本語学習者の長音の産出に関する習得研究－長音位置による難易度と習得順序－」 『日本語教育』 109号 (日本)日本語教育学会 pp.110-117
- 木村匡康(1986) 「言調聴覚論 (Systeme Verbo-Tonal) に基づく外国語の発音指導」 『語学研究』 9号 神奈川大学 pp.1-27
- 近藤真理子(2012) 「日本語学習者の音声習得における第一言語特有の干渉と普遍言語的干渉－日本語教師のアンケート調査から－」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 57号 pp.21-34
- 鄭恩禎·桐谷滋(1998) 「ピッチパターンが日本語の有声・無声の弁別に与える影響」 『音声研究』 2-2号 pp.64-70
- 戸田貴子(1998) 「日本語学習者による促音・長音・撥音の知覚範疇化」 『文芸言語研究. 言語篇』 33号 pp.65-82
- 二ノ宮崇司他5人(2010) 「韓国人日本語学習者による「ザ行音」「ジャ行音」の聴取・発話能力の関連性」 『言語学論叢』 オンライン版3号波筑大学一般・応用言語学研究室pp.57-73
- 福岡昌子(2005) 「韓国人学習者の日本語破裂音の縦断的習得研究：知覚」 『三重大学留学生センター紀要』 7号 pp.25-34
- 松崎寛(1999) 「韓国語母語話者の日本語音声－音声教育研究の観点から－」 『音声研究』 3-3号 pp.26-35
- 皆川泰代(1997) 「長音・短音の識別におけるアクセント型と音節位置の要因－韓国・タイ・中国・英・西語母語話者の場合－」 『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.123-128
- 関光準(2007) 「韓国人日本語学習者の発話に見られる促音挿入の生起要因」 『音声研究』 11-1 日本音声学会 pp.58-70
- 六川雅彦(2008) 「聞き間違いに関する音韻的観察」 『6thBiennialConferenceonPracticalLinguisticsofJapanese』 Proceedings』

要 旨

本稿の目的は、日本語音声の聞き取り調査を通して韓国人の聞き間違いを分析、考察を行い、学習者が目標言語である日本語の音韻体系をどのように習得しているか、その全体像を明らかにすることである。

20代のソウル及びソウル周辺の方言話者である中上級の日本語学習者13名を対象に、日本人により発話された調査語の音声を聞かせ、書き取るテストを行った。

分析の結果、韓国人の聞き間違いは、大きく(1)清濁の問題、(2)長音、促音、撥音の特殊拍、(3)拗音、(4)子音交替、(5)母音の変化、その他に分けられ、そのうち子音の聞き間違いが最も多かった。

また、調音点・調音法が同じである音の間で聞き間違いが起りやすいことが明らかとなり、聞き間違いが起こる原因は、単に母語の影響のみではなく、言語普遍的なものもあることが示唆された。

また、学習者間で聞き間違いの種類と頻度に差があり、同じ母語話者間でも音韻構築の様相が異なっていることが分かった。より効果的な日本語音声指導のためには、まず学習者の頭の中の音韻地図を把握するのが先決であろう。

さらに、音韻の知覚におけるアクセントの影響が見られ、音声指導の際、各音韻の異音や余剰の特徴について教えることで、聴取能力の向上も期待できると思われる。

最後に、これまでは、対照分析法に基づくミニマルペア方式の音声指導が主流であった。本研究で得られた知見を生かすことで、音声指導の順位や学習者別の指導が可能となり、より効果的な音声指導が期待できよう。

キーワード : 韓国語母語話者、日本語の発音、聞き間違い、中間言語、音韻習得、日本語音声教育

투 고 : 2013. 8. 31
1차 심사 : 2013. 9. 14
2차 심사 : 2013. 10. 5